

【随想】わすれられないおくりもの

——江島恵教先生——

下田 正弘

古いアルバムの頁を迫りかけるように、私が江島先生に思いを馳せるとき、最後に至り着くいくつかの風景は、なぜか一つの色合いを帯びている。景色としては単一ではないのだが、不思議にも皆同じような色に彩られている。それが私にしては珍しく曇りのない、鮮明なトーンであることに、また驚きを感じてしまう。気づいてみればこの色合いは、私が今学問を進めて行く上で、その背景をなす大切な色調となっていた。そしてあらためて今、これこそが、江島先生から私が確かにいただいたものであることが分かる。

* * *

私が仏教の研究を志ざし曲りなりにもここまで続けることができたのは、明らかに自分にはなかったものを、ことあるごとに与えられてきたおかげである。もしそうした出会いがなければ、私にとって研究の存続はとうてい不可能であっただろう。仏教研究を道として選んだものの、困ったことに一方で私には、そもそもことばの扱いを生業とすることに拭いがたい不信感があった。努力を事実として積み上げてゆく無口な人々に対して、知的訓練を経たものが能力に任せて経験の伴わないことばを駆使し、その威力によって極端な場合には、努力を無化し、怠慢を美化することさえできる。そしてたとえいかに周囲を惑わせても、本人のみはその言説から自由であることの可能な職業が真つ当な職であろうはずはない、そんな極端な思いがどこかで脳裏を離れなかった。

個人の価値観に関わるこうした繊細な問題は、常識を持った人間なら社会の表舞台で語りはしないだろう。それをナイーブに表さないストイックさこそ、大人の社会人としての証であるに違いない。この若気の至りとでも言われそうな疑問は、しかし、年月を待っても私の中から消え去ることはなかった。自分の歩もうとする道の出発点に、一点の不信が宿っていることほど不安定なものはない。時が経って研究室での学生生活に慣れ生活上の違和感が解消されると引き換えに、この不信はかえって誰にも語れない事実ようになって私の心底深くに根を下ろしていった。

* * *

そんな私が修士課程の二年目を迎えようとする春、江島恵教先生が長岡技術科学大学から東京大学に助教授として転任されることになった。まだ正式な着任前の三月、気の早い先輩の助手は、私たち学生を集めて先生の歓迎会を開いた。当時の私には、院生の先輩も助手も先生たちも皆同様に雲の上の存在だったので、この歓迎会がどんな意味を持っているか推し量る術もなかった。けれども教官として研究室に所属するようになった今、果たして新任教官の赴任前に助手と学生のみが研究室で歓迎会を催すことが可能だろうかという素朴な疑問が湧きあがる。少なくとも私自身も含め他の先生方の場合には、そんな勇氣のある行動をしてくれた者はいなかったように思う。ともかくこの出発は江島先生にまこ

とにふさわしかった。

江島先生との出会いの原風景でもあるこの歓迎会の宴席で、私は以後の学問の展開に大きな影響を与えることばをかけられた。先生は当時私が進めようとしていた涅槃經の研究の方向を聞き、「それでは空中分解する、やめたほうがいい」と即座に言われ、「涅槃經をバラバラにできないか」と、まったく気取りのないことばで忠告された。実はその答えは私自身がどこかで感じながらも何か確信の持てなかった問題を見事に言い当てており、聞いた途端に納得できるものがあつた。そしてこの時の一瞬のやり取りで私の歩むべき方向は決まったように思う。大乘涅槃經というテキストにおいて、あらためて大乘を問ひ、涅槃を問ひ、經を問ふ。涅槃經を、自己に既知と思えた世界から解放し、より大きな可能性に開く作業である。

その後、私の研究の大切なポイントとなるいくつかの問題が、江島先生と、何れもお酒の席でゆったりと時を共有する中に暖められていった。それをいちいちここに挙げ尽くすことは不可能である。

* * *

先生の大好きなことばの一つにシンポジオンがある。文学部の先生はお酒を通して学生に「教育」をするという、聞く人が聞けば不謹慎としか思えない内容が、実際に私が経験したことがらである。お酒の場を借りての「教育」は開放感が勝ちすぎて理性が失われ、奔放な感情のみが支配する場となるおそれがあるかもしれない。そんな無作法を嫌い、酒宴を敬遠する行儀のよい知性もあってよいだろう。しかし逆にそうした機会にこそ、その人の知性の内実が人間性全体を背景として鮮明に現れ出ることも否めない事実である。知性の輝きは、経験の耐え難い重みと、その重みを突き抜けようとする自由な魂の間に飛び散る火花のようなことばとなって姿を現す。しばしば形ばかりの礼儀と体裁を優先するしらふの場とは異なって、酒場は修羅場ともなる。そこにおいては、言い繕われた空っぽの経験と、偽装した臆病な魂とが妥協して作り出す借り物の真理など、取りつく島はない。

こうした質の問題は、究極的には外から与えられるものであるよりは、各自が自力で切り拓き、一人前進する中において解決されるものである。その意味では教育ということばは馴染まないのかもしれない。けれども、たとえ最後には一人で進みゆくにしても、そのためにはまずは道を歩く決意をしなければならぬ。ところが先に述べたように、仏教を学問とすることへの一点の不信が拭い去れなかった私には、この決意こそがもっとも困難な問題なのだった。

そしてこの大きな心の変化は、私の内部からのみは起こり得なかった。それには、この道を進むことの意味を私に伝えてもらうこと、つまり「教育」の手助けが不可欠だった。今にして思えば、先生が深夜までお酒を飲みながら取り留めのない話を私に語っていたことは、ことばを学問とすることの意味をさまざま角度から親身に示してもらったことに尽きてしまう。それはもちろんそのまま、先生ご自身が自らを説得されようとすることばでもあつた。

* * *

私は自分が研究対象に選び取った仏教を、生きていく上で限りなく困難な経験と、そこに立ち向かおうとする正直な魂とが会おう世界であると考え、その研究とは、両者のせめぎ合う軌跡を追いかけることであると、いつの間にか勝手に信じ込んでいた。こんな前提が正しい保証はどこにもないし、ましてや証明などできようはずもない。むしろこうした勝手な思い込みを離れなければ、通常、研究は成立しないと考えられるだろう。少なくとも個人的な価値観と客観的の学問とはすっきり分けてしまわねば、いたずらに問題が錯綜しかねない。さらに反省すれば、仏教ということばそのものが、異質な要素や現象の集まりに与えられた集合名詞に過ぎないと考えられるのだから、その意味ありげな統一を解体してみせる腕前を研究成果として示すほうが、はるかに学問的に思えるかもしれない。

しかし、私は不器用にもこの何れの選択もできなかったようだ。ここでは純粋に文献学的研究は問題にしていない。けれども少なくとも仏教の、ことば、思想、そして歴史といった問題に踏み込む場合、ちょうど素粒子のような微細な世界に入り込むとき、観察者の立場が否応なく観察結果に反映してしまうように、自らの持つことばや経験はどうしても研究対象そのものに大きな影響を与えてしまう。この一点はいかなる思想研究においてもその基本的制約となる問題であろう。

とすれば最後にいつも私に問われるものは、自分のことばの中にどれだけの経験の重みと精神の運動が込められているか、あるいはどれだけの虚栄と怠惰が潜んでいるかという点に尽きるのであり、それをあえて表現するか否かは別としても、これを措いて思想研究の信頼度は計りえない。この点を不問にして研究を続けるとき、いかに粗悪な汚れた手で、この上なく繊細で清浄なものを弄び、やがて取り返しのつかないほど垢まみれにしていることかと慄然たる思いがする。自分が相手とする世界は、どこまでも自分より広やかで、清く、高貴である。私にとってこの無邪気な前提は今もって変わることがない。

一見矛盾するようだが、主観を安易に研究に入れ込むことを厳に戒めていた江島先生は、この私の意識を根本においてもっともよく理解していただいていた。逆に、仏教を自分よりも小さな世界に取り込み、都合よく批判したり、賞賛したりする態度を極端に嫌われていた。より大きなものを相手として研究をする場合、研究者は次々に自己の小さな殻を脱していかなければならない。だが、より小さな世界を相手とする場合、いかに知的意匠が凝らされたかに見える論文であっても、その中には、結局どこを取っても卑小な自己しか表現されていない。

* * *

人を評価する場合には、その人が「何を言っているか」ではなく「何をなしているか」によるべきだとの格言は、思想研究を標榜する仏教学者の場合にもそのまま当てはまる。もちろん仏教学者の「なすこと」の主要な部分は「言うこと」そのものであるから両者の区別はつきがたい。だがこの二つはまったく同じことではない。

仏教学者の「なすこと」は「言うことへの責任」という形で現れる。この責任を表すことばには、いささか古めかしいが、アンガジュマンという語を当てることができるだろう。言うことは言いっぱなしで終るのではなく、それが実際のでありえるのか実験する場がな

なければならない。さらに言ったことが現実にどんな効果を生み出し、そこに自己がどう参与していけるのかという、これまた現実的な問題として捉え直されなければならない。逆に言えば、これを確かめる術のない発言は、評価のしようがないという意味で無意味であるし、はじめから確かめる気のない発言は、およそ迷惑な独り言である。

アンガジュマンは、本来なら目の前の政治への態度表明にまで繋がってなければならないのだろうが、自分の器として今私はそこまで踏み込むことはできない。しかし、仏教を読み解くことを通して仏教に向かって発言し、翻ってそれを社会に向かって発信する立場にある者は、その発言によって何が起ころのか、慎重にその行き着く先を見届ける義務がある。発言はただ波風を立てればよいというものではない。発言した現実に誠意をもって参画し続けなければ、結局は自己主張のために仏教を研究対象として利用し、発言の場として活用し、その目的に周囲を巻き添えにしたにすぎないこととなってしまう。

* * *

このことに気がついたときに取りえる態度は、与える害毒を自覚して発言を控えてしまうか、効果に前向きに期待して発信へ踏み切りか、そのいずれかとなる。前者はペシミストであり、後者はオプティミストである。どちらの自己主張が強いという問題ではない。自己の現れ方が両者でまったく異なっているのである。

生来おそらくは楽天的な私から見たとき、江島先生は極端なくらい前者の立場にあった。自己の発言は、基本的に不要なものを世の中に付け加える苦々しい作業であるという、おそらく生理的とも言える感覚がどこか先生には感じられた。これは先生が卓越したことばの感覚をもちながら、「空」を相手として真摯に研究を進められた事実に、そして歴史を机上ではなく、現実の場において捉え直そうとされた態度に本質的な関係がある。

語れば語るほど、ことばは取り返しのつかない問題を残していくと気づいたとき、ことばと社会の関係の出発点において、人はすでに負債を抱えており、発言への責任などおこがましきの限りであることを自覚している。その際ことばは、ただ自己においてのみ生まれ消えることを許される独り言とならざるを得ない。そのときアンガジュマンはことばによって果たされるのではなく、何らかの行動によってのみ遂行されるべきものとなる。ことばはむしろ、絶えず懐疑の眼差しに晒されねばならないのであり、簡単に自立することは許されないのである。

* * *

ことばへのそうした禁欲的感覚を持った先生に向かい合うことは、私にとって、ときに苦しい経験でもあった。私のことばは容赦なく破壊され、いくら表現しようとしても不可能な場面にしばしば出くわした。立ち往生して、会話を拒絶されているとしか思えないときさえあった。けれども先生は事実として、どこまでも私と話をしつづけていただいた。

先生が倒れられる前夜、私は先生と二人で、渋谷でお酒を飲んでた。深夜になり、もう他の客は誰もいなくなった頃、ちょっとしたことで口論になった。先生はふと「下田、おまえの悪いところは、そうやってしゃちこぼるところだ」と私をたしなめられた。私はその普段聞きなれないことばとやさしい響きに少し驚いて、妙に納得して頷いてしまった。

そしてその直後、信じられないことばを耳にした。「いやあ、俺もしゃちこぼるんだ。俺の全共闘運動、あれはしゃちこぼとった……」。

お会いして二十年、先生の人生、学問の中核を形成する時期から、先生の中心にありつづけたはずのもっとも大切な体験について、私は驚くべきことばを初めてお聞きした。先生がかつて、まさにアンガジュマンということばとともに参画した運動を是認することばを聞くことはあっても、否定する言い回しはこれまで一度として聞いたことがなかった。それを、私をたしなめることばと同時に、途端にご自身にも向けられるとは……。私はその瞬間、急に先生が透明になってしまったように感じられた。

学問を追求し、それを社会の場において表現し、さらに実践によって確認しようとした江島先生の生き方に、私はかつて心から憧れた。そこには権威に果敢に挑戦する、若々しい精神が輝いていた。しかしやがて先生が東大の教授となり、さまざまな秩序の中心に立ち、まるで権威を価値の中心に据えるかのような態度に変わったと思えばじめたとき、かつての憧れはそのまま批判の対象となってしまった。しかし思えばその憧れも批判も、ともに私が先生を外からしか見ていなかったことの現れだった。私から見れば埋めようのない断層に思えた歴史も、先生の中では、途切れることなく連続していることに思い至る力がなかった。

* * *

今私が江島先生を思い出すとき、何よりも本来私が持ち得なかった「学問としての仏教」の姿とともに現れてくる。それはもちろん現実の仏教から生まれ、現実の仏教と確かな接点を有してはいるのだが、しかしけっしてそれに巻き込まれてしまうことなく、独立した価値をもって私の中に存在している。それは生の現実のままでは見えにくい問題を、濁りを清めることによってより見えやすくし、問題に正確に接近するための大切な道筋をつける努力である。間違っても現実の仏教にはない問題を勝手に作り出し、それを周囲に突きつけたり解決してみせたりするパフォーマンスではない。学問としての仏教には、私がかつて知らなかった、透き徹った世界がある。

そして私にとっての仏教学は、当然のことながら時とともに少しずつ姿を変えていく。けれども私とその新しいものに出会うたびごとに、始まりには江島先生との出会いがあることが、いつも新たな形で確認され直すのである。そのとき私は、先生が今も向こうから私におくりものを差し向けられたという思いがしてならない。

しもだ まさひろ

(東京大学大学院人文社会系研究科・助教授)